

# ポンペイ壁画から辿る古代フレスコ画の歴史

～『ポンペイ・エルコラーノ、トッレ・アヌンツィアータの考古地区』～



ヴェスヴィオ火山が噴火したのは、紀元 79 年のこと。火山灰で埋没した古代都市ポンペイは 1748 年からの発掘でその姿を現し、現在でも発掘は続いています。紀元 79 年当時のポンペイはローマの植民都市でした。この時代はローマ帝国が隆盛<sup>りゅうせい</sup>を極め始めた頃で、翌年の西暦 80 年には世界遺産『ローマの歴史地区』に在るコロッセウムが完成しています。ポンペイの歴史は更に古く、紀元前 8 世紀ごろから街が徐々に形成され、実際に壁画が描かれ始めたのは、紀元前 2 世紀頃からとするのが一般的な見解です。紀元前 2 世紀からポンペイの街が消失するまでの間、ローマは共和制から帝政<sup>とうしゅう</sup>にかけての時期で、既に壁画の技法が確立されており、ポンペイの壁画もその踏襲<sup>とうしゅう</sup>された優れた技法によって描かれています。ポンペイ遺跡について特筆すべきことは、壁画の出土品の多さです。これにより、古代ローマ時代の生活の様子などがビジュアルでわかるようになりました。ポンペイに限らず、古代ローマ時代には至る所で壁画は描かれていましたが、長い歳月の中での風化や破壊などもあり、思ったほどは遺されていません。その意味でも、ポンペイの壁画はととても貴重なのです。



ポンペイ「秘儀荘」



『マルスとヴィーナス』／サルスティオの家

では、この壁画はどのような技法で描かれたのでしょうか。当時、テンペラ絵具や油絵具はまだ開発されていません。その多くは「フレスコ」で描かれています。フレスコ画は中世（5世紀頃～15世紀頃）の後半から見受けられる、とお思いの方もいらっしゃるでしょう。フレスコ画の代表作には、イタリアのルネサンス期に描かれたミケランジェロの「システーナ礼拝堂の天井画」やラファエロの「アテナイの学堂」などがあります。一般的に中世のフレスコ画は、ジョット（1266年頃～1337年頃）などから始まる著名な画家たちが描いた宗教色の強い絵画作品のことを指しますが、中世以前のフレスコ画は、ポンペイの壁画のように、それほど宗教色はなく、作品を描いた人物が特定できないものが殆どで、生活の一部として広く普及していました。フレスコ画は紀元前から描かれていて、その歴史は古いのです。

まず、フレスコとは、「壁面に描くための絵画技法名」です。壁面に石灰と砂などを混ぜた下地（＝漆喰）を塗り、その漆喰が乾き切らないうちに水溶性の顔料（絵の具）で描く、という技法です。また、フレスコ画は、後の時代のテンペラ画や油彩画のように、絵具の定着剤を使わないのも大きな特徴です。壁に色素が染み込み定着し、絵というよりは、壁の色が強調されます。したがって、時代を経ても色素が残り、鮮やかな色彩を保てるのです。

フレスコにはいくつか種類があり、最も一般的なものは上述のフレスコで、「ブオン・フレスコ」と言います。その他、「フレスコ・セッコ」という技法もあります（フレスコと呼んで良いものか、見解が分かれるところですが……）。フレスコ・セッコは、壁面に石灰を塗り、生乾きではなくしっかりと乾燥させ、その上に描く手法です。乾いた状態の上に、そのまま顔料だけで描こうとすると着色が難しいので、顔料（石や土）に定着剤を混ぜて塗ります。それがブオン・フレスコとの大きな違いです。定着剤は膠（動物、魚など由来）、カゼイン（牛乳、チーズなど由来）卵など粘着性のあるものです。後のテンペラ技法に似た技法と言えるでしょう。ブオン・フレスコと比較すると、発色や耐久性は劣ります。

フレスコの技法は他にもありますが、ここでは割愛させていただきます。以下述べていただくフレスコとは、ブオン・フレスコとお考えください。ポンペイの壁画は、このブオン・フレスコという見方が主流です。

もしヴェスヴィオ火山が噴火しなかったら、ポンペイの壁画はどうなっていたでしょう。おそらく多くは現存しなかったと思います。風雨に晒され続けた壁画には、2,000年もの耐久性はありませんし、現実的には家の建て替えなどで壁と一緒に壊すこともあるでしょう。ポンペイの壁画は、軽石や火山灰などの火砕流堆積物に埋もれていたため、壁の損傷は思ったほどひどくなかった、意外と鮮やかな色彩のまま遺されたなど、まさに、壁画における「奇跡の相乗効果」が起きたのです。

次に、フレスコ画の歴史を<sup>さかのぼ</sup>遡ってみます。



ラスコーの洞窟「牡牛の大広間」壁画、「牡牛、馬、鹿」

フレスコ画は、なんと、約1万5,000年～2万年くらい前の先史時代から描かれるようになった、とされています。その代表とも言えるのが、フランス南西部にある「ラスコーの洞窟壁画」、つまり、世界遺産『ヴェゼール渓谷の装飾洞窟と先史時代』の洞窟壁画です。描いたのはクロマニヨン人で、ヴェゼール渓谷には147の先史遺跡と25の装飾洞窟があります。ラスコー洞窟は一般公開されていませんが、近くに「ラスコーII」という複製洞窟があり、当時の洞窟壁画がそっくりな状態で再現されています。どの壁画も先史時代の人々が描いたとは思えないほど見事で、特に「牡牛の大広間」に在る作品は、大胆かつ正確に動物の形が描かれていて、立体感があり、落ち着いた色調です。しかも、走っている動物の4本の足の出方が合っているなど……かなりの描写力です（後世の画家たちは、動物の動きを表現することに苦労しました）。現代の芸術家の作品と見紛うほどで、これには驚かされま<sup>みまが</sup>す。顔料は赤土などに動物の脂などを混ぜたものと考えられ、動物の毛や木の枝などを使って描かれています。なぜそれがフレスコ画なのかというと、洞窟内の炭酸カルシウムと顔料が結合し、壁に顔料が染み込み定着したと解釈できます。偶然にも、これは「フレスコの原理」と一致します。また洞窟内であったため、良い保存状態を維持できたのです。



アルタミラ洞窟の動物壁画、「ステップバイソン」

スペイン北部の世界遺産『アルタミラ洞窟とスペイン北部の旧石器時代の洞窟壁画』でも同様なことが言えます。洞窟の奥深くに描かれたことにより、良好な保存状態が保たれました。このようなことから、先史時代の壁画は「天然のフレスコ画」と言われています。『すべてがわかる世界遺産大辞典〈下巻〉』にも詳しく書かれているのでお読みいただきたいのですが、アルタミラ洞窟などの壁画も岩肌の凹凸を活かしながら、ぼかしの技法を使って立体感を出すなど、高度な絵画技法が用いられています。まるで、レオナルド・ダ・ヴィンチの「スマート技法」のようです。「マグダレニアン美術」と呼ばれ、主にクロマニヨン人が描いた先史時代の壁画を指します。しかし、その後の地球の温度上昇や人類の生活スタイルの変化などで、この地域では紀元前1万1,000年以降、洞窟壁画は描かれなくなりました。

その後、洞窟壁画が描かれていた時期とフレスコの技法が確立し始めた時期の境目は明確ではありませんが、古代オリエントを中心に広がっていったものとみられています。人類最初期の定住農耕遺跡として2012年に世界遺産に登録された、トルコの『チャタルヒュユクの新石器時代の遺跡』では、壁画や天井画などが発掘されていて、紀元前7,400~5,200年の間に描かれた、おそらく技法が確立し始めた頃の“最古のフレスコ画”と考えられます。これらの壁画は、アンカラのアナトリア文明博物館に展示されています。



「チャタルヒュユク遺跡」の壁画

古代エジプトに目を向けると、紀元前3,000年以降から壁画が描かれています。エジプトのフレスコ画はブオン・フレスコか、それともフレスコ・セッコなのか、技法については様々な見解があります。特徴としては、平面的な作風が数千年もの間、脈々と継承されていたことです。ルクソールの世界遺産『古代都市テーベと墓地遺跡』のカルナック神殿内に遺る壁画などは、その象徴的な壁画です。人物が茶褐色で描かれているのは、色彩的に引き立ちます。はっきりとした輪郭線、デフォルメされた形、くっきりとした黒い瞳、背景や周囲を白系統の色にするといった色調にも工夫を凝らし、まるで近代デザインのようなのです。



「カルナック神殿」内に遺る壁画

ギリシャでは、クレタ島のクノッソス宮殿から、紀元前 18～15 世紀のフレスコ画が発見されています。色彩豊かで明るい感じのする、フレスコ画です。このミノア文明遺跡の大部分は、イラクリオンに在る考古学博物館で展示されています。しかし、クノッソス宮殿は世界遺産に登録されていません。クレタ島で栄えたミノア文明は、古代ギリシャよりはるか 1,000 年以上も前なので、古代ギリシャ関連の世界遺産とは別の遺跡群となるからです。また、サントリーニ島もミノア文明とは深い関係にあり、紀元前 3,000 年頃、クレタ島からミノア人が移住し、アクロティリ遺跡では船などが描かれたフレスコ画も発見されています。紀元前 1,500 年頃、このサントリーニ島で大噴火が起き、アクロティリ遺跡は火山灰で埋もれてしまいました。まさに“エーゲ海のポンペイ”です。この大噴火が「エーゲ海のアトランティス伝説」を生んだとも、されています。そして、フレスコ画は、古代ローマの時代、ポンペイの壁画へと展開していきます。



「クノッソス宮殿」の壁画「青の貴婦人」

ここまでご紹介したヨーロッパとその周辺地域の世界遺産には、すべて登録基準 (iii) が含まれています。つまり、文明や時代の証拠を示す遺産であり、発掘されたフレスコ画が、当時の証拠を示す役割をも果たしているのです。

一方、アジアでは、スリランカの世界遺産『シーギリヤの古代都市』の岩山の西側の壁に「シーギリヤ・レディ」と呼ばれる、華やかな装身具で身を飾った「天女」たちを描いた壁画があります。これは、5 世紀に描かれたフレスコ画です。



「シーギリヤ・レディ」



アジャンターの石窟寺院の壁画  
「王妃と召使い」

インドの世界遺産『アジャンターの石窟寺院群』には、インド最古の仏教壁画があり、仏教美術が隆盛を極めた6～7世紀頃にフレスコで描かれた壁画が、数多く遺されています。

中国の世界遺産『敦煌の莫高窟』は、世界最大級の規模を誇る仏教壁画群で、500余りの洞窟の中に描かれています。壁画の多くは、4世紀以降、約1,000年に渡り描かれたフレスコ画です。敦煌はシルクロードの拠点であったため、フレスコの技法は、世界遺産『シルクロード：長安－天山回廊の交易路網』によってもたらされたもの、と考えられます。



「莫高窟」とその壁画「聖観音」



「高松塚古墳」の壁画  
「西壁女子群像」

そして、朝鮮半島の世界遺産『高句麗古墳群』にも、4～7世紀頃に描かれたフレスコで描かれた壁画があり、後述の日本の高松塚古墳やキトラ古墳の壁画との関連性も指摘されています。

上記5件のアジアの世界遺産には全て、文化交流を示す遺産として登録基準(ii)が含まれています。描かれたフレスコ画が、西洋と東洋の文化や価値観の交流を示す証となっているのです。と同時に、フレスコは、古代オリエントからアジアへと伝播し、地域や宗教に関わらず取り入れられた技法でもあるのです。

そして日本は、というと、暫定リスト登録物件の「飛鳥・藤原の宮都とその関連遺跡群」の高松塚古墳やキトラ古墳には壁画があります。いずれも7～8世紀頃に描かれたフレスコ画と考えられていて、日本は、古代オリエントから端を発した“フレスコ画の最終到着地点”です。もし世界遺産に登録されれば、日本のフレスコ画の世界遺産第1号になります。絵画は持ち運びができる動産なので世界遺産とはなれませんが、高松塚古墳やキトラ古墳の壁画は動産ではないので、世界遺産になることができます。私はそうなることを願っているひとりで、とても楽しみです。ご参考までに、昨年2021年に登録された『北海道・北東北の縄文遺跡群』には、壁画はありません。また、北海道余市市のフゴッペ洞窟や小樽市

の手宮洞窟では壁面彫刻が見つっていますが、フレスコとは異なります。日本では有史以前のフレスコ画と呼べるものが、未だ発見されていないのです。

絵画には、たくさんの種類があります。テンペラ画、油彩画、水彩画、日本画……。フレスコ画はあまり馴染みがないかもしれませんが、有史以前からの歴史ある絵画なのです。今回は、古代のフレスコ画の歴史を辿ってみました。紀元前7,000年頃から紀元後の1,400年頃まで長きに渡るフレスコ画には、その時代ごとの歴史の伝承が垣間見えます。そして、フレスコ画をもつ数多くの史跡は、世界遺産に登録されています。フレスコ画は、遺産価値を高めることにも、貢献しているのです。世界には、未発見の洞窟壁画やフレスコ画が、まだまだあるでしょう。フレスコ画は、他の手法で描かれた作品より劣化や損傷が少ない分、数万年経ても数千年経ても、当時の様子を伝える役割を担うことができます。発見された地域に、いるはずのない動物が描かれていたり、その場所にはない顔料で描かれていたり……。発見されるたびに歴史を動かす出来事となるでしょう。

古代のフレスコ画は、単なる作品ではなく、古代の人々が現代人へと語りかける、新しいメッセージでもあるのです。

沼田政弘

写真画像 : Wikipedia Commons